

シルクロードの異文化交流

前田耕作氏 アフガニスタン文化研究所
所長

1980年にNHK特集「シルクロード」が1年間にわたり放映され、シルクロード旅行の一大ブームを巻き起こしてから35年以上。2014年の世界遺産登録を機に再びブームの兆しが見える。日本と日本人にとってのシルクロードの意味とは何か。専門家が解説した。

シルクロードの要はアフガニスタンであり、アフガニスタンこそ仏教の聖地でもあります。インドを起源とする仏教には、南のタイやカンボジアなどへ伝わった小乗仏教と、中国や朝鮮を經由して日本へ伝わった大乘仏教があります。大乘仏教の伝播ルートは、インドからいったん西へ向かい、パキスタンを經由し、インダス川の支流でアフガニスタンから流れ出るカブール川に注ぐスワート川を上流へ向かったものと、アフガニスタンから山を越えアムダリアを經由した2つのルートで中国へ向かったのです。それが時を経て中国から日本に至りました。つまり、アフガニスタンは日本の古代文化と深いつながりがあるのです。

アフガニスタンのバーミヤンには大仏が2つあります。玄奘法師がバーミヤンを通った際の記録『大唐西域記』にこの2つの大仏のことが記されています。東方の大仏は高さ38mの釈迦牟尼仏で、西方に立つ高さ55mの大仏は弥勒如来。どちらも石に刻んだ像です。高さ38mといえば、日本では薬師寺の東塔の高さと同じ。55mは東寺の五重塔と同じで、バーミヤンの仏像がどれほど巨大か想像できると思います。

なぜこれほど巨大な仏像が作られたのか。インドから西へ向かった仏教西漸の記念碑的な存在として作られたと考えられます。仏教はここからさらに西へと向かおうとしますが、ゾロアスター教の厚い壁に阻まれて跳ね返されます。バーミヤンは、偶像なくただ聖火を拝するゾロアスター教と仏教がぶつかり合った地で、仏教は巨大な偶像を作ることで勝利の記念碑としたのではないかと推測することが

できます。

しかし、バーミヤンの大仏は仏教の記念碑的存在ではあるものの、実は異なった宗教文化の融合を示す存在でもあるのです。それは東大仏の頭上の天井壁画からわかります。そこにはギリシアの太陽神やゾロアスター教の影響も受けた太陽神の図柄が描かれていたのです。この壁画はギリシア文明とペルシアの古宗教、仏教を重ね合わせ東西の異文化融合の象徴でもあったのです。

イスラム過激派による大仏の破壊で天井壁画も失われましたが、記録されていた写真データをもとに東京藝術大学が原寸大で完全に復元しました。今春には同大学の美術館で特別展覧会が開催され、大学美術館への来場者としては異例ともいえる7万人もの見学者を集めました。また特別展を見た安倍晋三首相はその迫力に感心し、各国首脳が集まった伊勢志摩サミットの会場に復元壁画をやや縮小したものを設置しました。文化遺産の破壊は戦争犯罪ですが、たとえ破壊されても現代の技術を駆使すれば復元が可能であり、破壊は無意味であるというメッセージを天井壁画の完全復元を通して伝えたのです。

最近の8つの話題

シルクロードをめぐる話題を取り上げてみます。1つ目は「長安／天山回廊の交易道路網」、いわゆるシルクロードが世界遺産に登録され、同時に日本の「富岡製糸場と絹産業遺産群」も世界遺産に登録されたことです。シルクロードの世界遺産登録に

関して、私たちは日本の文化遺産を拡大登録すべきと主張しましたが、富岡製糸場の同時登録によりシルクロードと日本の間に橋を架けることができました。

2つ目はシルクロード考古学の第一人者である加藤九祚先生が9月にウズベキスタンで発掘作業中に客死され、大きな知的遺産を失ったこと。3つ目は9月に沖縄の勝連城跡の発掘調査でローマ帝国の銅貨が見つかったというニュースです。沖縄とローマが海の道によってつながったことは痛快な報道でした。

4つ目は平城宮跡から出土した木簡に、ペルシアを意味する「破斯」の名称が記されていたことです。日本の古い時代からすでにペルシア文化と深いつながりが存在したことは正倉院の遺物からも判りますが、今回は文字による大きな発見です。5つ目は世界遺産である万里長城の恣意的な保存修理の話題。経済優先の修復はかえって遺産破壊につながるという教訓を得ることができます。

6つ目は敦煌の近況です。60～70年代のシルクロードブームの牽引役は日本で、数万人規模だった日本人旅行者が最近では2000人を切るほどに減少しています。中国政府が敦煌を顧みない時代から日本の文化支援によって遺跡が守られ、日中交流にも大きな影響を与えてきた敦煌への旅行者の激減は非常に残念です。

7つ目は日本では未発刊ですが、英国のラウトレッジ社がシルクロードの研究本「The Silk Road」(全4巻)を出版したことです。出版社のころざしが違います。

そして8つ目がシルクロードと日本とのかかわりの歴史を伝える「シルクロード検定」を平山郁夫美術館とNHK出版が共同で実施することです。

世界遺産登録と日本の存在意義

シルクロードが実現した国境を越えた異文化交流の歴史は今あらためて、その価値が注目されています。そして、その学術的な中身を作り上げてきたのは実は日本だったのです。ですから、シルクロードの世界遺産登録の過程でも、シルクロードの東端であることを主張し、最終的には世界遺産の説明前文にシルクロードには朝鮮・韓国や日本が含ま



Profile

まえだ・こうさく ● 1933年生まれ。名古屋大学文学部卒。64年に学術調査団の一員としてパーミヤンを初訪問。以降、アジア地域で古代遺跡の実地調査を行う。1975年から2003年まで和光大学教授を務める。ユネスコ日本信託基金に基づくパーミヤン遺跡の保存・修復活動にも携わる。東京藝術大学特別顧問。

れることが記述されました。また、世界遺産登録に際して、カザフスタン政府は日本の支援に感謝の意を表明しています。

シルクロードでやり取りされたのは、ただ商品ばかりではなく、思想や宗教、そして文化であったこともわかってきています。旅行商品を企画する際には、ぜひとも古代中国の外交官、張騫の墓も組み込んでいただきたい。紀元前129年に武帝の命を受けて西域へ向かった張騫は、シルクロードを旅して中央アジアへ足を踏み入れた初めてのアジア人でもあるからです。その張騫の墓が陝西省の漢中にあります。丸1日を費やすこととなりますが、その価値はあるはずです。

来年8月にシルクロード検定

公益財団法人平山郁夫シルクロード美術館は、一般を対象とする新規事業として「知とロマン再発見シルクロード検定」を実施する。第1回を17年8月に予定しており、受験申込者数は5000人が目標。実施級は1～4級にマイスター級を加えた5段階で、第1回では4級(初級)と3級(中級)の2段階で実施の見込みだ。受験用テキストはNHK出版から年内に出版予定。同財団は事業の発展へ、協賛企業を一口50万円(年間)で募集している。